



TITLE:

七夕の夫婦星が會合した話

AUTHOR(S):

荒木, 健兒

CITATION:

荒木, 健兒. 七夕の夫婦星が會合した話. 天界 1934, 14(161): 419-419

ISSUE DATE:

1934-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166873>

RIGHT:

ろしいです。F8 には少々手こずつて居ります。F8 なれば一寸長過ぎますが、平面は40mm. 位がよいでせう。能率は一寸簡単に申し兼ねます。レンズよりも遙かに反射鏡の方が像が鋭い物です。25mm. 位のアイピースで見て眞圓の像でなければなりません。一般にテツサは仲々良いレンズです。

16センチ F3 は作りはしますが大分むづかしい物で、50圓許りかゝります。寧ろ此より人像玉の8センチ位の物を御求の方がよいでせう。

中 村 要

七夕の夫婦星が會合した話

倉敷天文臺 荒 木 健 兒

京都帝國大學文學會編「國語・國文」といふ雑誌の新年號（第三卷第一號）に、市川寛氏の「道長をめぐる人々」といふ一論文がある。その中に次のやうな文字を發見した——

長和四年七夕の夜には、例の夫婦星が會合したのを次男の敦通が慥かに目撃したと云ひ出した。最早五十歳に達した分別盛りの道長ではあるが、これを信じて仰々しく日記に書きとどめた後に「件事昔人人見之云々、近代未聞事也。感懷不少」と一方ならぬ感慨を敘してゐるのである。……實に面白いことであるから、一月の岡山支部の天界研究會の席で發表すると、水野先生は「それは流星であらう」といはれた。流星とすれば、牽牛星の方から織女星の方へとんだか、又はその反對に織女星の方から牽牛星の方へとんだものであらうし、光度もかなり大きいものであつたらしい。

そこで私は、その頃の七夕を八月の月上旬或は中旬として、天文年鑑の流星輻射點表を通覽したが、デニング氏の赤經280° 赤緯+44°のものとも考へられるし、或は赤經290° 赤緯+53°のものとも考へられないこともない。しかし、いづれにしてもナンセンスで、小槓流星課長の御骨折りになる過去の記録を一つ調査する勇氣？はない。

(1933年1月30日)